

ナガレタゴガエルの沢



3月1日(日)午前11時30分、気温1.3℃、水温3.2℃。旧栗野町を流れる栗野川の上流では、数日前に降った雪がまだ残っていた。胴長を履いて水に入り、流れの中にある石をひっくり返すという作業を続けていると、石のすき間から、微かに生き物の気配が感じられた。目を凝らすと、**2匹のカエル**が重なり合っている。溪流に生息する**ナガレタゴガエルの繁殖**が始まっていたのだ（写真参照）。

ナガレタゴガエルは、1978年に**東京都の奥多摩**で発見され、1990年に新種として記載された比較的新しい種である。普段は森林の林床やその周辺に生息しているが、秋になると水中で生活するようになる。つまり、文字通り”**流れ**”の中で生活するカエルなのである。

強い流れのある水中生活に適應しているため、後肢の指の間に”**みずかき**”が発達している。この特徴は、姿形がよく似ているタゴガエルと区別する際の目印となる。また、繁殖期（2～3月）になると、雄はホルモンの影響で**皮膚がぶわぶわ**にたるんてくる。「このカエルどうしちゃったの？」と思えるくらい奇妙な姿であるが、じっとしていると、川底の石や落ち葉と区別がつかないほど、背景にとけ込んでいる。

カエルというと**田んぼやため池**という独特のイメージがあるが、ナガレタゴガエルのように入里離れた**山奥の溪流**に棲むカエルも存在するのである。様々なカエルが生活したり繁殖したりする場所を考えると、「多様な種が存続するには、多様な環境が必要である」ことがよくわかる。カエルを通して、生物の様々な問題が見えてくることもあるのである。